三重県図書館協会報　2022年3月23日発行

協会だより No.73

目次

「デジタルミュージアム　秘蔵の国　伊賀」を全公開しました ……1
トピックス～図書館をめぐる話題から～ ……2
令和2年度全国図書館大会三重大会を契機とした図書館振興事業（新時代を拓く図書館振興事業）のご報告 ……4
研修会のご報告 ……6
新館案内 ……8
ブックエンド ……8

編集・発行　三重県図書館協会＝津市一身田上津部田1234　三重県立図書館内　電話：(059)233-1181

「デジタルミュージアム 秘蔵の国 伊賀」を全公開しました

伊賀市上野図書館

伊賀市はかつて藩主、藤堂高虎に「秘蔵の国」と評され、古来より様々な文物がもたらされた歴史文化の宝庫です。

伊賀上野城下町に起居した俳聖松尾芭蕉や戦国時代各地で活躍した伊賀流忍者、江戸時代に伊賀・伊勢を統治した藤堂藩に関する資料など、たくさんの宝物があります。

市では、市や（一社）伊賀上野観光協会等が所有する貴重な資料をデジタル化してインターネット公開するデジタルアーカイブ化事業「デジタルミュージアム 秘蔵の国 伊賀」を進めてきました。

「デジタルミュージアム 秘蔵の国 伊賀」では、5つのテーマに分け、令和2年10月から一部を先行公開し、「芭蕉と俳諧の世界」「伊賀流忍者」「郷土資料」の3つのテーマを見ていただいていましたが、令和4年1月27日、残り2つのテーマ「伊賀市の文化財」「歴史探訪」を追加し、全公開しました。

「芭蕉と俳諧の世界」では、俳聖松尾芭蕉の真筆やゆかりの俳人、「伊賀流忍者」では忍術書、「郷土資料」では藤堂藩関係資料や参宮講看板などの歴史資料を紹介しています。資料の詳細頁では、高精細な画像を拡大して細部まで見ることができ、紙質や墨の濃淡も知ることができます。また、原文と翻刻文を並べたり、重ねて表示することもできます。

「伊賀市の文化財」では、伊賀市内にある501件の指定・登録文化財を紹介しています。この文化財数は三重県内の市町で最多を誇る数です。「歴史探訪」では伊賀流忍者や壬申の乱と古代伊賀、伊賀の寺社建築など、歴史や文化にまつわる場所を8つのテーマに分け、紹介しています。場所を地図上に示していますので、テーマや地域から目的の場所をたどることができます。現在の地図と、江戸時代の地図を重ねて表示することもできます。

伊賀の歴史・文化の魅力を満喫していただくことができるよう工夫しました。

この「デジタルミュージアム　秘蔵の国　伊賀」により、学校での子どもたちの学びや地域の文化活動に役立てていただくほか、市内外に伊賀の宝物を発信し、伊賀の歴史や文化の魅力を知ってもらうきっかけとしたいと思います。

ぜひ、「デジタルミュージアム　秘蔵の国　伊賀」にアクセスしてみてください。

詳しくは、「アデアック　伊賀」で検索いただくか、伊賀市ホームページにある「秘蔵の国　伊賀」のバナーをクリックしてご覧ください。

「デジタルミュージアム
秘蔵の国　伊賀」QRコード

「デジタルミュージアム　秘蔵の国　伊賀」

トピックス
～図書館をめぐる話題から～

企画展「タイムスリップ１９６４」について

三重県立図書館　長久哲平

きっかけは職員同士の何気ない会話から。当館2階にある文学コーナーで開催中の企画展がそろそろ最終日を迎えることもあり、次の企画展までの2週間ほどの期間をどうするか考えていた。

「もうすぐ東京オリンピックが開幕だし、小学生たちは夏休みだね。だったら、小学生向けの内容で１９６４年の東京オリンピックを振り返ってみよっか」

こうして決まった企画展だが、当初の案では、１９６４年の東京オリンピックの様子を新聞記事や関連する書籍等を通じて紹介するとともに、東京２０２０オリンピック聖火リレーの写真を展示し、現在から１９６４年へとタイムスリップするように当時をふりかえる内容を考えていた。

ところが、当時の新聞や雑誌記事を調べていく中で、この年は現在の県庁舎完成や県章・県民歌の決定など、三重県にとっても重要な年であったということがわかってきた。

そこで、企画展の構成を変更し、１９６４年に県内で起きた出来事を紹介するコーナーを加えることにした。日頃、社会見学で図書館にやってくる子どもたちには、「図書館は古い新聞や雑誌を実際に見ることができるので活用してほしい」と伝えているが、身をもって我々職員が感じる機会となった。いつ使われるかわからないが、いつか使われるかもしれないので、当時の様子をうかがうことができる資料は保存しておく。一見、無駄に思えるかもしれないが、図書館の重要な役割の一つではないだろうか。

こうして何とか開幕を迎えることができた企画展。時期的にタイムリーだったこともあり、多くの方にご来場いただき、新聞・テレビ等にも取り上げていただいた。「高校のときの文化祭前夜みたい」という職員の一言がとても印象に残っている。

企画展ポスター

展示風景

※「タイムスリップ１９６４」会期：令和3年7月16日～8月4日まで

「プレパパママ教室における取り組みについて」

尾鷲市立図書館　矢賀敏代

尾鷲市のブックスタート事業は福祉保健課の担当で、保健師が新生児家庭を戸別に訪問し行っています。図書館としてもお母さんたちに読み聞かせの大切さを直接伝えたいと思い、福祉保健課が行っていた「プレパパママ教室」（3回講座）の、「胎児への読み聞かせ」を担当することにしました。

お腹の胎児に向けて、お母さんの声で絵本の読み聞かせをすることは、母体の精神安定にもつながり、胎児の成長にもプラスに働きます。それに、出産後はあわただしく、余裕もありませんが、妊娠中ならゆったりとした時間が確保でき、生まれてくる赤ちゃんへの絵本選びや、読み方の練習もできます。ご夫婦で参加すれば、お父さんにも関心を持ってもらえます。

図書館でのプレパパママ教室では、そういった「胎教」としての読み聞かせの効果の説明や、絵本やわらべうたの紹介もしますが、何よりお母さんお父さんに絵本の楽しさを知っ

てもらうことを大切にしています。大人になると、誰かに絵本を読んでもらう経験などほとんどありませんが、「絵本は読んでもらうととても楽しい！」を体験することで、自分も子どもに読んであげようと思うのではないでしょうか。親子で絵本を楽しむ時間を持ってくれるようにと、赤ちゃん向きの絵本だけでなく、大人が読んで楽しい絵本や、子育てに参考になるような「子どもの気持ちがわかる」絵本も読み聞かせし、楽しんでもらっています。

プレパパママ教室の様子

福祉保健課と連携したことで、図書館に初めて来るという方も多く、司書と顔見知りになり、図書館に通うようになってくれました。参加者のほとんどは赤ちゃんが生まれたら、おはなし会へ参加してくれて、確実な成果となっています。

出張!!

新館案内

※今年度は新館が2館あるため、「トピックス」に新館案内を出張掲載しています。

海山図書室

海山図書室は、令和3年10月9日に紀北町生涯学習センターの1階にリニューアルオープンしました。同じ地区内にあった「海山図書室」と「児童図書室」の2つの図書室を、1つにまとめた図書室になります。蔵書は約3万冊となり、子どもから大人まで楽しめる図書室になりました。

室内は、木目を基調とした内装で落ち着いた雰囲気になっており、閲覧席以外にも座れるスペースをたくさん配置しました。ゆっくりと本を選んだり、その場で気軽に読むことができます。

児童図書ゾーンには、靴を脱いで上がることができる「おはなしコーナー」があり、小さなお子様も利用しやすくなっています。定期的によみきかせの会も開いており、わらべうたや手遊びを取り入れながら、徐々に絵本に慣れ親しんでもらえるよう取り組んでいます。

児童図書ゾーンと同じ空間にブラウジングゾーンがあり、育児や料理などの実用書をまとめた「くらしのコーナー」と「健康・スポーツのコーナー」を設置しました。児童図書ゾーンにいる子どもに目が届く場所で、親も読書を楽しめるよう本の配置を工夫しました。

学習ゾーンには、ひとつひとつに区切られた学習机やテーブル席があり、各席にコンセントが設置されているので、学校で使用しているタブレット端末を利用して勉強することもできます。テスト期間になると満席になるほどの人気です。

オープンして5ヶ月ですが、11月と12月にはポプラ社のなぞ解きイベント「ひゃっか王からの挑戦状」、1月には「新春福ぶっくろ」イベントを開催しています。新しくなった図書室に足を運んでもらうきっかけになるよう、イベントに力を入れています。

これからも多くの方に図書室を利用していただきたいです。

イベント時の様子

ブラウジングコーナー

令和2年度 全国図書館大会三重大会を契機とした図書館振興事業（新時代を拓く図書館振興事業）のご報告

令和2年度の当協会による全国図書館大会三重大会を契機とした図書館振興事業のうち、新時代を拓く図書館振興事業では、名張市立図書館と三重県立津高等学校図書館の2館が助成の対象となりました。

昨年度は、新型コロナウイルス感染症の影響等により、年度内に事業をご報告いただくことが難しかったため、本号にてそれぞれの館から、ご報告をいただきました。

①「これからの図書館について考えるシンポジウム」について

名張市立図書館　萩原大介

去る、令和3年の2月21日（日）、名張市立図書館で、「令和の公共図書館が果たすべき役割」をテーマに「これからの図書館について考えるシンポジウム～図書館でできること、図書館ができること～」と題して、第1部に講演会（60分）第2部に事例発表及びパネルディスカッション（計90分）の2部構成で実施しました。

講師には、講演会講師及びコーディネイターとして令和元年度の全国図書館大会三重大会第1分科会「公共図書館（2）」で、基調報告をされ、当館図書館協議会員でもある皇學館大学准教授・岡野裕行氏、奈良大学・嶋田学氏をお招きし、第1部に岡野氏の基調講演と奈良大学嶋田学氏の先進事例報告を行いました。第2部のパネリストについても、先の2名に加え、全国図書館大会で登壇された方を中心に出席いただきました（コーディネイター1名パネリスト5名）。

当館視聴覚室の定員は80名ですが、コロナウィルス対策のため、ソーシャルディスタンスに配意し、40名とさせていただき、当日は登壇者及び関係者を除く、地域づくり関係者、図書館ボランティア等を中心に定員一杯の40名の方に参加いただきました。また、定員を減じた分については、YouTubeにてリアルタイム配信を行い、当日は東京都、亀山市、志摩市、伊賀市の図書館関係者及び、皇學館大学の学生など、29名の方がリアルタイムで視聴されました。また、配信終了後も閲覧いただいており、令和3年3月30日時点で、430名の方に閲覧いただきました。

シンポジウム終了後、10名以上の方から、新たにボランティア参加の申し出があり、既存のボランティアと合わせて40名ほどの図書館ボランティアが積極的に活動しています。

現在は、まだ図書館主導で事業展開をしていますが、今後、ボランティア自身による事業企画などを進める動きが活発化しており、今後の発展に期待しています。

また、パネルディスカッションの中で紹介されましたブックピクニックについて取り組んでみたいとまちづくり団体の方から図書館に申し出があり、今夏実施に向けて継続的に協議が進むなど、具体的な成果が早くも出てきています。

今後、こうした動きを止めることなく、ボランティアやまちづくり団体との協働を進め、一時的なブームに終わることなく、継続的な取り組みへと進化させていく必要があります。

また、昨今の新型コロナウィルス感染症の影響でイベント等の縮小がみられる中、安全性に配慮しつつ、ボランティアや団体のモチベーションを落とすことなく、事業実施を進めていく必要があります。

講演にご参加いただいた市民の皆さんからは、今後の図書館の在り方や図書館との関わり方について、非常に示唆に富んだ内容で、勉強になっただけでなく、一層図書館事業への参画意欲が掻き立てられたというご意見を多くいただきました。

職員一同、ボランティアの皆さんと協同して活動を行いながら、図書館の取り組みを、市民の皆さんに広く知っていただき、おもわず図書館に来たくなるような、ボランティアに参加したくなるような取り組みとなるよう進めていきたいと思います。

②津高生の学びのために「ウィキペディアタウン@津市安濃町」を開催！

三重県立津高等学校図書館
井戸本吉紀

きっかけ

「ウィキペディアタウン」とは、地域にある文化財や観光名所などの情報をインターネット上のウィキペディアに掲載し、誰でも街の情報にアクセスできる環境を作る取組です。日本では平成25年から全国に広がり、図書館や博物館が主催して開催する例もあります。

津高校では、三重大学地域イノベーション学研究科の西村先生をお招きし、放課後ゼミで「三重（津）を元気にする方法」を考え、首長にプレゼンしています。毎年10人以上が自主的に参加するのですが、少しもったいないなぁと思っていました。というのも、忙しい生徒達は地域に出かけず、頭の中だけで考えがちなのです。

ウィキペディアタウンは実際に地域を歩いて人の話を聞くところが良いと感じました。また、資料を元に調べ、考え、議論し、記事を書く過程で、資料の使い方や著作権を学ぶことは、今後の探究活動に活かせると考えました。

工夫した点

通常ウィキペディアタウンは1日で終わるものなのですが、今回は高校生ということもあり、事前学習を3回開催しました。ちゃんと記事を書こうとすると、「書かれていることを正確に読み取る読解力」「読み取った情報を自分の言葉に置き換える文章力」が必要と聞いていましたが、事前学習で実感しました。

安濃郷土資料館

コロナ禍の中での開催

令和3年2月開催予定を6月に延期し、さらに延期し7月22日に開催しました。ウィキペディアン（ウィキペディア編集者）の方々の直接指導はかなわず、イベント当日に記事を掲載できませんでした。夏休みも調査・執筆を続け、10月27日にウィキペディアに公開することができました。

いざ執筆

「津綟子」記事（追記）

「安濃城」記事（新設）

「経ヶ峰」記事（新設）

生徒が学んだこと

ウィキペディアンの方からは「出典を載せる経験を」と言われました。出典と参考文献が書かれていれば、誰もが記事の内容を検証できます。著作権の関係から、資料やWeb情報の引き写しは認められていませんし、自分の意見や偏った観点の内容を書くことも公平性の観点から避けないといけない。ウィキペディアの方針は、そういう情報の扱いや情報発信の基本を踏まえていることも学んでもらいました。

最後に

参加者からは「参考資料から自分の言葉で書き直すのが難しかった」「資料を読んだ後で地域を歩くと実感が湧く」という感想をもらいました。図書館ではあまり利用を推奨していないと思われるウィキペディアですが、ウィキペディアンの真摯な支援を通じ、私自身のウィキペディアのイメージも大きく変わりました。

今回の活動記録集は、津市図書館、三重県立図書館等で保存されています。今後、PDF化して津高図書館HPにも設置予定です。やってみたい方は、お気軽に津高校図書館までどうぞ。

※この原稿は 公益社団法人全国学校図書館協議会『としょかん通信』2021年11月号（380号）付録「ぷらすあるふぁ」を基に執筆しました。

研修会のご報告

第107回全国図書館大会山梨大会

11月11日、12日に開催された、第107回全国図書館大会山梨大会（オンライン形式。動画視聴期間：11月11日～12月31日）には、当協会の令和3年度全国図書館大会三重大会を契機とした図書館振興事業のうち、図書館職員の人材育成事業（研修等への参加）をご活用いただき、8館18名の方にご参加いただきました。その中から、鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部図書館の奥平佳苗さんに大会の様子をご報告いただきました。

第107回全国図書館大会山梨大会に参加して

鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部図書館　奥平佳苗

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、昨年度に続き今年度もオンライン大会であったが、録画配信もされていたため、通常業務との調整がつきやすく、その分様々な分科会に参加できたことは大変有意義であった。その中でも実際の業務と直接関わりのある第2分科会発表「場としての大学図書館の役割」に参加した報告をしたい。山梨英和大学附属図書館長と都留文科大学共通教育センター長の「大学図書館としてのあり方」の講演の後、図書館でサークル活動をする学生たちの実際の活動内容や声が取り上げられていた。「大学図書館のあり方」については、アフターコロナでは、書籍の郵送貸出や学術情報のデジタル化が急速に進み、図書館に足を運ばなくても図書館のサービスを受けることができるようになったが、「リアルな場」としての図書館は以前にも増して重要である、という点について深く考えさせられた。また学生の図書館サークル活動では、様々な活動内容が報告されていたが、全て学生の自主性を重視した活動であり、何か企画を立てる際は、自ら企画書を作成し、メンバーを募集し、活動場所を探し、連携の場を探す、またビブリオバトルへの参加では人前で話し自分の意見を伝える等、活動内容が直接社会へ出るために必要な基礎能力につながっており、本学もぜひ参考にさせて頂きたいと感じた。

今回の全国図書館大会に参加して、日本全国の図書館で利用者のニーズに応え図書館をより盛り上げていこうと様々な取り組みがなされていることを知り、とても刺激を受けた。出来るところから少しずつ、自館のニーズに合わせて取り入れていきたいと思う。

図書館職員基礎講座

比較的経験の浅い職員向けの研修である基礎講座を、オンライン形式にて開催しました（ライブ配信：10月1日、オンデマンド配信：10月12日～11月30日）。「資料の受入から除籍まで」をテーマに、三重県立図書館資料調査課の野島主査、芳野主査、米島主任の3名が講師を務めました。この研修には49名の方にご参加いただき、その中から鈴鹿医療科学大学附属図書館の田上幸一さんにご報告いただきました。

図書館職員基礎講座に参加して

鈴鹿医療科学大学附属図書館　田上幸一

今回、「資料の受入から除籍まで」というテーマで三重県立図書館での選書・購入・寄贈・除籍に関する研修を受講しました。

ある意味図書館における永遠の課題かと思います。選書、購入、寄贈、除籍というキーワードはそれぞれがそれ一つだけでも大きなテーマであり、個々のお話を聞く機会は多々あるかと思いますが、今回はその一連の流れを一つの大きなテーマとしてお話を聞くことができ、大変参考となりました。

特に細かく明確な方針が策定されていることには当たり前なのでしょうが、さすがだなあといたく感心しました。

翻って当館では、明確な方針というより、過去の経験の項目の羅列であることを改めて痛感しました。

当館でも所蔵スペースの確保は大きな課題となっており、寄贈された図書の受け入れをどう判断するべきか、蔵書の利用価値をどう判断し除籍対象としていくべきかが課題となっています。

特に医療系大学の大学図書館ですので、医療工学系や医療情報系の図書を蔵書しておりますが、それらの分野は技術の進歩が早く、どこまで古い図書を残していればよいか、その判断に頭を悩ましております。この点について今回の研修は大変参考になりました。

基礎講座＿質疑応答時の様子（講師）

当館は、三重県立図書館のような大規模な公共図書館ではなく、小規模な大学図書館ですので、どのように当てはめていくかということはなかなか難しそうではありますが、今回の研修をよい契機として、当館で取るべき方針は何かということをさらに考え、よりよい蔵書構成を目指して取り組んでいきたいと思います。

図書館職員専門講座

ある程度の経験年数を経た職員向けの研修である専門講座を、オンライン形式にて開催しました（ライブ配信：11月18日、オンデマンド配信：12月1日～1月5日）。「現代社会におけるデジタルアーキビストの役割」をテーマに、岐阜女子大学教授、特定非営利活動法人デジタル・アーキビスト資格認定機構常務理事・事務局長の井上透氏を講師にお招きしました。この研修には、28名にご参加をいただき、その中から、いなべ市北勢図書館の瀬古章代さんにご報告をいただきました。

図書館職員専門講座に参加して

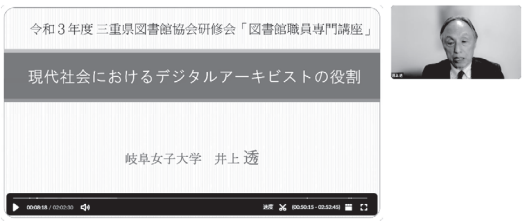
いなべ市北勢図書館　瀬古章代

昨今の新型コロナウイルス感染症の影響もありオンライン形式での受講となりました。通常移動に片道2時間かかるところ、その時間を業務に充てることができました。対面の方がより理解しやすいとは思いますが、遠方からでも参加しやすくとても良かったと思います。

研修ではデジタルアーカイブの語源や公文書管理法の他、理論、アーカイブを運営する図書館や博物館の事例紹介、今後の動向など基礎的な事柄を丁寧に教えて頂きました。今まで私はデジタルアーカイブを活用する機会が少なかったのですが、事例の紹介を受けレファレンスにも活用できるサイトが多く存在することを知り驚きました。

また、本やテープ媒体の音声、映像といった資料は破損しやすく、時間の経過や地震などの災害により失われてしまう可能性があります。デジタル化することで永久的に保存することは最善の方法であると理解できました。デジタル化により多くの人がいつでもどこでも必要な形で情報を得ることができます。デジタル化し公開する・しないは後で検討すればよいので、まずはデジタル化を進める事が重要だというお話が心に残りました。

このようにデジタル化には利点が多い反面、電子機器操作や肖像権・著作権などの法律といった多くの専門的な知識を必要とします。すぐに着手できるものではありませんが、デジタル庁創設などDX推進する社会情勢、情報提供に幅が広がる事や資料の長期保存という重要性を考慮すると、デジタル化は図書館で働く私たちにとって、関心を高めていくべき分野だと考えさせられた研修でした。



専門講座＿オンデマンド配信画面

新館案内

紀宝町立図書館

紀宝町立鵜殿図書館は、平成4年7月、当時日本一小さい村の鵜殿村中央高台に、鵜殿村立図書館としてオープンしました。平成18年1月に合併により紀宝町立鵜殿図書館となりましたが旧紀宝町の各地区からは遠く、道幅も大変狭い上に駐車場も狭い、バス停もないことなどから利用したくても大変不便だと言われていました。そのため、図書館主催の行事をキャンプ場や生涯学習センターなど町内の他の施設で開催し、移動図書館事業を実施するなど様々な工夫をしてきましたが、このたび神内地区の旧保健センターを改修し、令和3年4月、紀宝町立図書館としてリニューアルオープンしました。

館内の様子

紀宝町立図書館外観

新しい施設は一階が図書館、二階には子育て支援センターとホールがある複合施設で公募により決まった愛称は「紀宝はぐくみの森」です。施設の両隣には給食センターと福祉センターがあり、施設前にバス停、駐車場も駐輪場も道幅も広く、大変便利になりました。館内につきましては、児童コーナーが以前の2倍の広さになり、子どもや幼児用トイレ、授乳室、オストメイトや拡大読書器、エレベーターを設置するなど誰もが使いやすい施設を目指し、三重県のユニバーサルデザイン適合証交付を受けました。他には、ギャラリーや調理コーナーがあり飲食も可能なフリースペース、二階ホールは正面の壁がスクリーンになり映画など上映可能、床にはユニット畳を設置するなど、今後様々な関係機関と連携し、施設を幅広く活用できるように整備しました。今年度は早速、社会福祉協議会と連携し、週一回パンや焼き菓子の無人販売を行い大変好評です。

今後、この施設が地域の人々の夢や希望を育むことを願っています。

ブックエンド

『樹木たちの知られざる生活』

ペーター・ヴォールレーベン／著
長谷川　圭／訳
早川書房

松阪市松阪図書館
澤村静佳

ドイツの森林管理官が、日々自然林を管理する中で発見したことを綴っています。この本を読むと、私たちは木について知らないことが多いと気づかされます。樹木も社会性を持ち、子どもを育て、仲間とコミュニケーションを取り、時には助け合うことがあると知り驚きました。一見静かに見える木の周りは、動物や昆虫、菌類、微生物などたくさんの生き物が関わり合って生きています。樹木をもっと身近に感じられる1冊です。